

平成26年度 重点研究

I 学校教育目標 やさしく かしこく たくましく

目指す子どもの姿

- 思いやりのある優しい子
- 気づきを考えるかしこい子
- 粘り強くやりぬく子 たくましい子

II 今年度研究テーマ

思考・表現を高めていく指導のあり方

(1) 研究の推進について

研究は下記の2つの方向から進め、研究テーマに迫っていく。

○重点研究(道徳部会のみとし、低中高の3部会を組織)

各研究部会を構成するメンバーは、連学年を原則として組織する。各研究部会の研究内容をすべての学年において実践し、検証していける体制をもちながら進めていきたい。

○学年研究・個人研究

全校研究テーマに迫る上で、学年ごとに課題を挙げ、指導の方向を検討しながら実現してきたことを具体的な子どもの姿を取り上げながら教師が共に学び合う。このことで、表面的にしか見えていなかったことや見過ごしがちであったことを教師同士気付かせ合いながら、子どもたちの内面で起きているものを感じ取れる教師の目(心)を学び合いたい。毎週行われる学年会の中での教材研究をはじめとして、日常的に気軽に授業のことを語り合い、授業を見せ合い、学年の中で生かされていくものになりたい。また職員全体で共有ができる教材や指導法の研修なども行う。

各自が年度中に1回は授業を公開し、参観者が意見交換することで、一人ひとりの指導力向上を目指していく。

- ・指導案の形式は自由。授業を公開する際には、事前に研究主任に連絡をする。
- ・授業学年の職員をはじめ、全職員ができるだけ都合を付けて参観し、互いに学び合う。

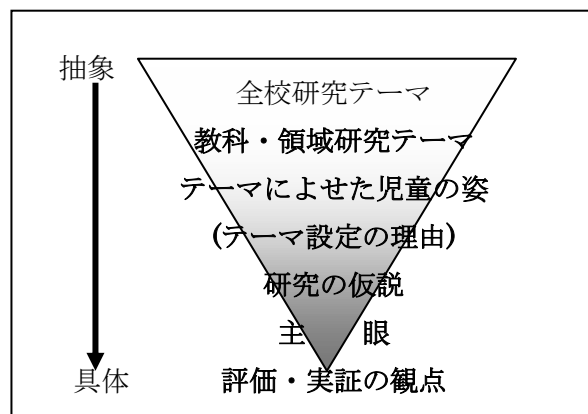
(2) 全校研究テーマを児童の姿で結実できるようにするために

① 「思考・表現力を高める」のとらえの明確化

…どのような児童の状態が高まった姿かを、教科・領域で明らかにする。

② 「意欲的に学ぶ児童」のとらえを明確化

…どのような姿が意欲的に学んでいる児童なのか、教科・領域で明らかにする。場面は様々考えられるが、どのような場面でどのような姿を構想しているかを明らかにして、その姿を具現するために何を手だてとして位置付けるかを明らかにする。



2 前年度の研究の成果と課題

(1)「思考・表現を高めていく」について

単元をとらえ直す

○研究テーマにある「高めていく」には、1時間の授業だけでなく「単元を通して」という意味を含めた。国語の「単元を貫く言語活動」、社会の「単元を通じた学習問題」など、「単元とは何か」といった単元のとらえ直しができた。また、算数でも「単元の目標」を大切に考え、既習に返りながら授業を展開することが確認されたり、道徳ではそれを1時間の中で行い、「価値の自覚」に迫るための支援のあり方を学年で検討したりすることができた。

授業中の教師の出

○道徳部会では、中心発問の場面での教師の問い返し(道徳部会まとめ1頁)を行った。これは、資料の登場人物の「ゴミを拾う」という行為に対して、資料の内容や子どもの経験から考えていかれるようにするための支援であった。思考の焦点化を図る有効性が示唆された。

○社会科部会では、子どもの意識を刺激する問いかけを行った。「で、K君です。11時4分頃『どうやって調べたらいい』追究方法を先生が問いました。そうしたらつづきました。『店長さんに聞く』(社会科部会まとめ4頁)このことにより、学習の解決の見通しがもっているK君の言葉を引き出すことができた。追究の見通しがもてるよう、子どもの意識にそって1時間を構想していくことの有効性が示唆された。また、板書の工夫も、子どもの思考を整理することにつながっている。

(2) 意欲的に学び続ける児童について

●社会科部会が進めてきた「指導の具体と改善点(社会科指導案1頁)」は、つける力とともに、単元を通して思い描く子どもの姿を端的にまとめている。また、1時間に目を向けた時に、評価部会が取り上げた「指導のふり返り(国語科指導案2頁)」は、教師の指導のあり方を問う。「真面目に取り組む子どもなので、教師主導の課題設定でよしとしてきた」「だから、指示待ちの子どもになってしまった」は、改めて評価に向かうための課題設定のあり方について考えるきっかけとなったが、継続考えていく必要がある。

(3) 部会のもち方

◇道徳部会の進め方は、月曜の重点研究の時間を有効に活用し、どの学級でも取り組める内容を検討し、日々の実践に直結する取組であった。また、全学級公開授業を実施したが、全校研究授業者だけの研究授業ではなく、私たち自身の研究にしていけることができた。1月以降、学年会で資料を検討したり、担任ローテーションで道徳を行う学年があったりと、日常につながる取組が増えてきている。

既習事項の積み重ね

○算数科部会では「既習をおさえる」ことについて、「知識」だけでなく「考え方」まで扱うこと(算数科部会まとめ2頁)で広がりがもてるのが話題になった。自分の考えがもてた後の説明(表現)する時に生かすことができる大切な視点である。

○評価部会では、「『ここに、こう書いてあるから、こう考えます』を毎時間行うことにより、考えの根拠としての叙述の大切さを感じることができた(評価部会まとめ1頁)」という成果を挙げている。教師が意図的に、そして継続して指導することの大切さを示唆している。



友との関わりにつなげる

●評価部会では、子どもの気持ちをどうつなぐかが課題として挙げられた。「読みを深めるとは、自分の考えが深まる。自分の考えが深まるには、自分の考えをもたなければならない自分の考えがもてれば友の考えと比べられる。叙述は根拠、根拠をもって始めて深まる(評価部会まとめ5頁)」このことから、子どもがさらに思考するためには、根拠や理由を明らかにしていく支援の必要性が示唆された。

○算数科部会ではK.Hさんの追究の姿から教師の適時的な関わりによって自分の考えをもち、グループ学習に臨み、自信をもって自分の考えを友に説明する様子をとらえている。(算数科部会まとめ4頁)意欲的に学び続ける子どもの姿に出会えるのは、教師の個別の関わり大切さがあるからだ^と考える。自分の考えをもつことができたときに、「友はどう考えているのか」が気になり、互いに意見を交換し合う意味を、子ども自身見出すのではないかと考える。

3 平成 26 年度の研究の方向

上記の昨年度の成果と課題に基づき、授業の基本「見て聞く、見て話す」を徹底するとともに、課題をもって自ら学んでいく児童の育成を目指し、研究テーマについては継続とし、引き続き「思考・表現を高めていく指導のあり方」に焦点をあてていったらどうかと考えた。

思考・表現を高めていく指導のあり方

また、昨年度の第 1 回の全校研究授業「社会」を受けて確認した 3 視点についても、授業づくりを進める上で今年度も大切にしていきたい内容だと考える。

1 単元・授業の終末の「児童の姿」を思い描き、ねらいを明らかにする。
(子どもが語る言葉)

2 教師自らが動き(考え)、そこから感じることを生かす授業展開。
(素材の本質は何かを探る)

3 子どもが思考・表現する場を構想する。
(子ども同士が関わる場の設定)

4 研究計画

(1) 全校研究授業の予定

- ・ 道徳(文部科学省「道徳教育総合支援事業」推進校)

(2) 研究計画、係内授業について

- ・ 教育計画にて今年度の方向を提案し、4 月中旬までに校長先生・教頭先生のご指導のもと、全校研究テーマなどを決定する。
- ・ 研究テーマについては、全職員が共通認識のもとで研究を進めて行かれるよう、実際の授業、子どもの姿から考えていかれる場を、4 月中にもっていかれるようにしたい。具体的には、1 学級授業を公開し、思考・表現について語り合う場を設けたいと考えている。
- ・ 平成 26 年度も県教育委員会学校教育課の指導主事を招聘した係内授業を位置付けたい。
- ・ 研究部会については、文科省指定を受け、教科・領域を「道徳」のみとし、本年度同様連学年を基本に部会を組織する。
- ・ 文科省指定以外で授業を行う場合は、本年度同様指導案の形式を自由とし、テーマと関連させるが、教科領域の課題に根ざすものとする。